

## —村史こぼれ話 12 —

### 三条大地震

文政 11 年（1828）11 月 12 日（太陽暦 12 月 18 日）朝八時頃、三条ではこれまで経験したことのない大地震が発生した。世にいう三条大地震である。地震の規模はマグニチュード 6.9 の直下型地震で、震源地は南蒲原郡栄町（現三条市）<sup>せりやま</sup> 芹山付近とみられる。

当時のかわら版は「弥彦山は大きく崩れ、海の中へ押し出し、三条町・燕町・東御門ぜき御堂・大門など残らず揺り倒れ、田畑・山川が崩れ、人馬・けが人はその数知れず、余震が 14 日まで頻発した古今稀なる大地震」と報じた。

この地震の被害地域は信濃川に沿った長さ 25km に及ぶ楕円形の地域で三条、燕、見附今町、与板などの家屋は殆ど全壊した。被災地全般では全壊 12,859 軒、半壊 8,275 軒、焼失 1,204 軒、死者 1,559 人、けが人 2,666 人、堤防の決壊 41,913 間という大きな被害であった。

現弥彦村域の被災状況については資料に乏しいが、旧矢作村田中新田の『斉藤家文書』には、「全壊は 1 軒、半壊 7 軒、部分壊 1 軒、被災住民数は男 26 人、女 31 人、死傷者記載無し。」とある。

当時の書『瞽女口説地震の身の上』はその惨状を次のように伝えている。

《越後の地震は言うも語るも身の毛がよだつ、・・・大地割れて砂をふき出し、水もみあげて、行くに行かれずたたずむうちに、風は激しく、後を見れば火の粉ふきたて火炎をかむり・・・中にあわれは手足をはさみ肉をひしがれ骨打ちくだき泣き叫びつつ助けしてくれと呼べどまねけど逃れる人も命大事と見向きもやらず・・・》

また、当時 72 歳の良寛はこの地震に<sup>あ</sup>会い、ひどく心を動かされて長詩をいくつも詠んでいるが、その一節を紹介する。

「…<sup>きょうとう</sup>驚濤 天を蹴つて <sup>け</sup>魚竜ただよい <sup>しょうへき</sup> 墻壁 <sup>そうせい</sup> あい打つて 蒼生 かなしむ…」

（大地震がおこり、海の波は天を蹴るように高まり、大魚も自由を失い、家の柱も壁も、折り重なって倒れ、人々は泣き叫んだ。）

（資料提供新潟市渡辺昭（麓一区出身）：参考文献『斉藤文書』『瞽女口説地震の身の上』

『三条市史』通史編、『吉田町史』通史編）